

【特集】薬害スモン関係資料の整理と活用 : 特集にあたって

SHIMIZU, Yoshihito / 清水, 善仁

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / Journal of Ohara Institute for Social Research

(巻 / Volume)

730

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

2

(発行年 / Year)

2019-08-01

【特集】薬害スモン関係資料の整理と活用

特集にあたって

清水 善仁

2019年1月、法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズは、所蔵資料の1つである薬害スモン関係資料の目録化を完了し、すべての資料を公開した。薬害スモン関係資料は、被害者団体の全国組織であるスモンの会全国連絡協議会が作成・蓄積した資料群で、1984年に大原社会問題研究所に寄贈されたものである。その後の経緯は本特集掲載の川田論文にゆずるが、薬害スモンをめぐる被害者の苦闘の歴史を物語る資料が公開されたことは、当該問題にかかる学術研究への貢献にとどまらず、スモンという1つの薬害事件の記憶を未来につなぐ資料に多くの人がアクセス可能になったという点で大きな意義がある。

そこで本号では「薬害スモン関係資料の整理と活用」という特集を企画し、このテーマにかかる3つの論点を取り上げることとしたい。第一の論点は、環境アーカイブズ所蔵の薬害スモン関係資料について、その全体像や資料整理の実際を報告するとともに、大原社会問題研究所以外でもおこなわれている薬害スモン関係資料の整理と活用についての紹介を通じて、薬害スモン関係資料の有する研究上の価値や利用可能性をはじめ、薬害にかんする資料の特性やそれをふまえた資料整理の方法論等について検討するものである。

川田恭子「スモンの会全国連絡協議会・薬害スモン関係資料公開の意義と課題」は、現在、環境アーカイブズにおいて薬害スモン関係資料の整理を担当する筆者が、資料群の内容や全体構造、資料的意義等についてまとめたものである。またその前提として、資料群が形成される契機となった薬害スモン事件の経緯についても紹介している。筆者はこのなかで、スモンの会全国連絡協議会のような被害者側の記録が「公文書のように記録を残すシステムが法で定められているわけではない」（17ページ）なかで、環境アーカイブズ所蔵の薬害スモン関係資料のように「被害者の記録が資料群として残されているという意味は、大きい」（17ページ）と指摘する。では、そうした資料群をどのようにして整理し公開・活用すべきなのか。川田論文は環境アーカイブズという規模の小さな組織におけるその実践報告でもある。

藤吉圭二「薬害アーカイブズは誰のためにあるのか——厚労省科研共同研究の経験から」は、筆者が現在、厚生労働省科学研究費補助金をうけて取り組んでいる薬害アーカイブズの調査・研究について論じたものである。はじめに筆者は、行政文書等のアーカイブズ資料そのものが有する資料的特性から説き起こし、そのうえで薬害をめぐるアーカイブズ資料について、行政機関や製薬企業の資料が「公開までの壁は厚く高い」（26ページ）状況のなか、薬害被害者のアーカイブズ資料が保存・公開されることは「薬害発生の経緯を検証し、再発を防ぐための知見を得るために [中略]

重要な役割を果たす」(27ページ)と指摘する。ついで、筆者が取り組む薬害被害者団体アーカイブズ資料の調査・整理についての経緯と現在の活動が述べられている。なお、藤吉論文には参考資料として「薬害アーカイブズ事業の現状と課題」および「簿冊目録の作成——NPO 福岡県スモンの会資料を例として」が付され、同科研におけるアーカイブズ資料の整理や保存の詳細がまとめられている。資料の概要調査や目録のメタ・データのとりかた等も記されており、資料調査の方法をより具体的に知ることができる。

第二の論点は、薬害スモンの被害者からみた、資料の整理・保存・公開の意義についてである。「薬害根絶のために記録の活用を——スモンの会全国連絡協議会事務局長 辻川郁子氏に聞く」は、スモン被害の当事者であり、スモンの会全国連絡協議会で事務局次長・事務局長を務めてきた辻川郁子氏の聞き取り記録である。ご自身のスモンとのかかわり、また今日に至るまでのスモンの会全国連絡協議会の取り組みの経過等について伺ったうえで、大原社会問題研究所に資料を寄贈された経緯や資料を整理・保存・公開することの意義についてお話いただいた。辻川氏はスモンの語り部活動をおこなう動機を「薬害根絶運動を支えてほしいと思うから、そのためには薬害がどうして起きて、どうすべきかということもお話しなくてはならないけれど、私がなぜ全協の事務局長として闘ってきたのかを、まず知ってもらいたい」(56ページ)と述べているが、被害者の高齢化等の問題に直面するなか、今後薬害スモンの実態を伝える資料の有する比重はますます高まっていくものと考えられる。「こういうことがどうして起こるのか、どうすべきなのかということを知ってほしいです。でも、一所懸命がんばった姿があるのですから、そのことはもうちょっといまの方たちにも知っていただきたいと思います」(57ページ)という辻川氏の言葉は、〈記憶の継承〉というアーカイブズのもつ重要な存在意義と、そのための資料の保存・公開の責務の大きさをあらためて認識させてくれる。

そして第三の論点は、薬害スモン関係資料の活用についてである。環境アーカイブズ等のアーカイブズ機関において資料が公開されるだけでなく、アーカイブズの側が主体的に当該資料を活用して、その資料の存在や価値を広く周知することはアウトリーチの観点からも重要な取り組みである。「大原社会問題研究所 100周年記念展示 環境アーカイブズ特別展「ノーモア・スモン 和解調印から40年 資料でたどる薬害の原点」報告」は、2018年度に大原社会問題研究所で実施された100周年記念展示の際の薬害スモン関係資料展示の記録である。実物資料16点と6枚の解説パネルによって構成された小さな展示ではあるが、薬害スモンの被害の実態や運動の経過等を紹介している。川田恭子による本記録は主として展示構成の意図や観覧者からの感想等を紹介するものであり、アーカイブズにおける普及啓発活動の一事例を提供する。

以上の各論考を通して、薬害スモン関係資料の意義や利用可能性が多くの人に認識され、今後広く学術研究等に当該資料が活用されることを期待したい。

(しみず・よしひと 法政大学大原社会問題研究所准教授)